

池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）

—創価女子学園卒業生へのインタビューを通して—

富岡比呂子

はじめに

1. 調査の概要

- ① 本研究の目的
- ② 調査対象・時期
- ③ 調査内容
- ④ 倫理的配慮
- ⑤ 分析方法

2. 結果

- ① 当時の学園生活に関する質問
- ② 今から振り返ったときの学園生活の意味を明らかにする質問
- ③ 女子教育についての質問

3. 考察

- ① 創価女子学園の思想的基盤——3年間の学園生活の意味づけとは
- ② 幸福観と女性の生き方について
- ③ 創価教育の継承

はじめに

ある教育機関に流れる思想を研究する上で、その学校の卒業生が、卒業後どのような人生を送ったかというライフコースを分析するという方法がある。また、卒業生がその学校での生活をどのように考えていたかを聞き取りを通してオーラル・ヒストリーという形で残していくことも、思想研究の手法の一つとして有効であるといえる。わが大学の創立者、池田大作（以下、池田と記す）が最初に創立した教育機関は、中学・高校であった。池田は1968年に東京に男子校である創価学園（中学・高等学校）を創立し、5年後の1973年に関西に創価女子中学・高等学校（創価女子学園）を創立した。去年の筆者の論文『池田大作の教育思想—女子教育の観点から（1）—』⁽¹⁾

⁽¹⁾ 井上比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（1）—」創価教育研究所『創価教育』2号、2009年、52-75頁。

では、おもに文献資料から池田の教育思想を女子教育という観点から読み解くという試みをおこなった。卒業文集や出版物、スピーチや指導集など関西創価女子学園においての池田の言説を通して、彼の女子教育に関する思想を分析するとともに、現代の女子教育におけるその特徴・独自性を考察した。

今回は、文献調査から一転、現場の声をとらえることに調査のフォーカスをシフトすることにした。本稿では、東京の男子校に次いで、関西に設立された創価女子中学・高等学校（以下、創価女子学園）に着目し、卒業生たちのオーラル・ヒストリーを通して、創価女子学園創立当初の女子教育における教育実践とその歴史、及び池田の教育思想を多面的に検証することを目的とする。創価女子学園が共学になる前の女子高体制だったのは、1973～1982年までと今から30年ほど前のことになる。草創期の学園の様子や、学園生として感じたこと、創立者に対する思い、現在でも印象に残っているエピソードなどを通して、池田が女子教育に期待していたこと、女子教育の精神的基盤、また卒業生たちに共通して見られる特徴などについて質的調査手法を用いて考察していきたい。現存する女子教育機関が創価女子短期大学のみになった現在、創価女子学園での記録を当時の在校生の観点から残していくことは、今後の池田思想の研究において有益な示唆が得られるものと考えられる。また、今回のインタビューを通して、創価女子学園での経験が、たった3年間の高校生活ではあったが、その後の卒業生の人生の方向づけに大きな影響を与えているという言説が多くみられた。その意味で、実際の卒業生の声を聞きとることは、文献からだけでは得ることができない、池田思想および創価教育についての新たな知見を浮き彫りにするものといえるであろう。

1. 調査概要

① 本研究の目的

創価女子学園での経験を通して、卒業生の内面がどのように変化したのか、また、卒業後約30年を経た現在、彼らが学園生活、また創立者をどのように意味づけているのかを探ることを目的とする。学園の志望動機、印象深い行事や創立者との出会い、女性の生き方や幸福観について聞き取る中で、学園生活がその後の進学・職業選択、結婚・子育てにどのような影響を与えているかを、インタビューをもとにしたオーラルヒストリーの中から分析考察する。本研究は質的・記述的研究であり、対象者自身の語りを基本にした分析をおこなう。

② 調査対象・時期

調査対象は、関西女子学園（創価女子学園）の草創期の卒業生9名。2009年9月から12月にかけて聞き取り調査を行った。半構造化インタビュー方式で、対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音を行った。インタビューはすべて個別に筆者が行い、かかった時間は一人当たり平均1時間～1時間30分程度であった。

③ 調査内容

インタビューガイド（表1参照）を用いて回答を得た。本人の自発的な語りによる自然な流れを重視したため、インタビューガイドにある質問項目以外にも出てきた対象者の語りも分析対象とした。質問会話の内容は、録音した音声ファイルをもとに逐語語録を作成してデータとして使用した。このほか、基礎資料として、現在の職業、結婚前の職業、子どもの有無など個人の属性に関する情報も収集した。

【表1 インタビューガイド】

<p>【インタビューガイド】</p> <p>1. 当時の学園生活に関する質問</p> <p>a. 学園を志望した動機について教えてください。</p> <p>b. 学園生活はどのような体験（経験）でしたか。</p> <p>c. 学園生活についてどのように感じていましたか。</p> <p>d. 学園に入学する時と在学時、卒業時と自分の中に変化はありましたか。</p> <p>e. 学園生活の中で特に印象深いことをあげるとしたら、なんですか。</p> <p>2. 今から振り返ったときの学園生活の意味を明らかにする質問</p> <p>a. 今となって学園生活はあなたにとってどのような意味をもっていますか。</p> <p>b. もし、高校1年生に戻って、学園生になるとしたら、また学園生になりたい（学園生活を送りたい）と思いますか。</p> <p>c. 今になって思う自身の学園生活のよかったところ、反省点はありますか。</p> <p>d. 今も心に残っている創立者の指導があれば、教えてください。</p> <p>e. もし子どもができたら、学園に入れたいと思いますか（もしくは、もうすでに入学させていますか）。</p> <p>3. 女子教育についての質問</p> <p>a. （ご自身が受けてきて）女子教育の良さとはどこにあると思いますか。</p> <p>b. あなたの幸福観を教えてください。</p> <p>c. 創立者が考える理想の女性とはどのような人だと思いますか。</p>
--

④ 倫理的配慮

対象者には、調査への協力を依頼するにあたって、研究の目的及び方法を明示したうえで、研究への参加・辞退は自由意思によるものであること、答えたくない場合は答えなくてもよいことを伝えた。さらに、データは個人が特定されないよう処理し、データおよび録音したファイルは厳重に保管しプライバシーの保護を厳守する旨を明記した調査依頼書を渡し、口頭での説明をおこなったうえで調査協力の承諾を得た。

⑤ 分析方法

データ分析においては、対象者が語ったライフヒストリーを語られるままに記述し、構成した。

そのため、結果の項の回答欄では「です・ます」体と「だ・である」体、また体言止めなどの表現が混在しているが、これは対象者の語りを忠実に表記したものと考えていただきたい。

次に、インタビューガイドの質問項目をもとにした分析枠組みにしたがって対象者の語りからエピソードを抽出し、ワークシートを作成した。また、今回は、語り手の視点から個人の生活史を浮き彫りにすることを通して、「語り手だけが持つ個人的な時間」「意味づけ」を他者にも理解可能なものに解釈し、秩序づけることを目的とし、分析考察をおこなった。結果の記述については、資料としての利便性を考慮して、対象者一人ずつに分けて記述せず、質問項目別に記述することにした。細かい内容を問う質問・語りについては、そのつど表記した。また、項目ごとに、回答から読み取れた事項や抽出されたキーワードを説明した文章を記した。

2. 結果

対象者の背景

調査対象者については表2に記した。期別は1期生（1973年入学）から7期生（1979年入学）までとなり、平均年齢は49.6（46～52）歳であった。9名中、専業主婦が7名、大学教員が2名となっている。また、現在8名が既婚者であるが、結婚前の職業は創価大学の職員、創価学会本部の職員、一般企業などであった。

【表2 調査対象者のプロフィール】

表1 調査対象者のプロフィール				
		期別	現在の職業	結婚前の職業
1	A	1	主婦	創価大学職員
2	B	1	主婦	創価学会本部職員
3	C	2	主婦	創価学会本部職員
4	D	2	主婦	一般企業
5	E	3	大学教員	通訳
6	F	3	主婦	創価学会本部職員
7	G	4	主婦	一般企業
8	H	7	大学教員	通訳
9	I	7	主婦	一般企業

① 当時の学園生活に関する質問

a. 学園を志望した動機について教えてください。

インタビューの最初の質問は学園を志望した動機についてであった。創価女子学園を受験する背景には、家族の勧めなどさまざまな要因があったと考えられる。このような語りが見られた。

「うちはとても貧乏だった。でも、母が一番行かせたかった。受験啓蒙で来ていた先生の話『学園が出来るときに受験できる年齢なのはすごい。私は来たくても受けられない。だから、来なくてもいいから受験だけでもしてください』という言葉が残っている。」（Cさん）

「小学校6年の時に、母が『先生が関西に女子高を作ってくださいらんだって』と聞いたとき、『絶対に行く！』とそのときに決めた。自分は将来、先生に励ましてもらえなくても、安心してまかせられる弟子、安心して未来を託してもらえる弟子になりたい、と思った。」（Dさん）

「自分で志望した。親は県立に行ってほしかったようだが、私は先生が作った学園に入りたかった。」(Eさん)

今回、回答を得た中で、9名中6名が自分自身で志願をし、残りは母や知人の勧めによって学園への受験を決意している。特に、自分で志願をした6名中3名が小学校の段階で創立者の池田に会う機会を得ていることがわかり、児童期における出会いが進路決定に影響を与えている可能性が示唆された。

b. 学園生活はどのような体験(経験)でしたか。

c. 学園生活についてどのように感じていましたか。

この2つの質問は、対象者からすると抽象的すぎて答えづらいようであり、またこの2問に対する回答も重複していたので、一つにまとめることとした。

「夢のような、おとぎの国のような、今から考えられないような、ああいう世界があったのかというような時間でした。大変なことはたくさんあったけど、振り返ってみるとあれだけ先生がご来校くださり、また、いい友人、教員に恵まれた素晴らしい時間でした。」(Bさん)

「夢のような幸せな三年間でした。全部が楽しかったです。」(Fさん)

「よく金の思い出とありますが、そうだったと思う。」(Iさん)

「まだ1年先輩しかいなかったから(本人は2期生)、自分に学園建設のために何ができるかを考えていた。先生の思いを、先生の代わりに伝えて、後輩を守ろうと思えたのが財産。」(Dさん)

「(卒業する時の決意として)先生から受けたご恩は計り知れない、でもその何万分の一でも応えていける人生でありたいと思った。自分は3年間先生の女子教育を受けたから、自分の五体をもって、自分の命を持ってこの女子教育を体現していきたい。自分の人生そのもの、生きざまが女子教育を体現するものだと考えた。一生かけて先生に万分の一でも、女子教育の実証を示していきたいと思った。」(Cさん)

「(池田)先生の作られた学校で勉強できる、いい環境の中で勉強できたことはものすごく嬉しかった。それと同時に、学園を好きなのに、あまりなじめない自分がいた。この葛藤がかなりあった。」(Eさん)

回答を見ると、「夢のような、幸せな」時間だったという個人的な感想があげられるとともに、草創期ならではの学園建設という視点からの意見が見られた。また、創立者に対する思いや、学園における自分の位置づけに対する葛藤を示唆する回答もみられた。特に、Cさんの回答からは、自分自身を女子教育の体現者と位置付けており、創価教育を自身の身を持って証明するのだという強い決意が伺えた。

d. 学園に入学する時と在学時、卒業時と自分の中に変化はありましたか。

この質問に関しては、多くの対象者が「変化があった」と回答している。

「それはすごくありました。素直に言うと、みんなが『先生!』と手を振るのを見て、はぁー(ちょっとついていけない)と思っていた。自分の中に同じ気持ちはあるが、それが50%か100%か、自分しかわからない。直接先生にお会いする機会もあったし。あの3年間がなかったら、人生が変わっていたと思う。人生の角度を決めた3年間だった。」(Bさん)

「そこで師匠を知ったということでしょうね。それがもう最大の原点。池田先生が自分の師匠なんだということを実に知った。生涯における原点の三年間。先生と共に生きていく人生はホントに素晴らしい人生だと思った。でも同時に、本当に大変なもの、甘いものじゃないということも感じた。でもこれ以上に素晴らしい人生はない、というふうにしたのが学園時代。この3年がなければ、今の私はまったくないはず。」（Cさん）

「先生を求めていきたいという思いが強まった。高校入るときには、親に『大学は国立にしてよ』と言われたが、高3の時に親を説得して創価大学に行こうと思った。新しい環境でなじめない、摩擦があったことで、いろんなことを深く考えるようになったと思う。」（Eさん）

「簡単にいえば、先生の方向を見て入学した。先生と同じ方向を見て卒業した、という感じでしょうか。最初は先生だけを求めて入学したが、卒業のときは、先生と同じ方向を見て生きていこうと決めたという感じです。」（Iさん）

「当時図書館2階に園子ちゃん人形（先生がロワールに行ったときに学園生に贈ってくださった、1メートル×1メートルの大きな人形）があったが、それを見た時に、先生の学園生に対する圧倒的な思いを実感して、驚いた。これが自身の中の一つの変化です。」（Hさん）

これらの回答から分かるのは、この3年間の中で、対象者たちの創立者に対する思いや自身が感じる創立者との距離が変化していることである。今回、インタビューをする中で、BさんやCさんに見られるように多くの対象者が、「この3年間がなかったら、今の人生はなかった」と学園生活のその後の人生に与える影響が、自身にとって決定的なものであったことを裏づける語りをおこなっている。また、園子ちゃん人形⁽²⁾など、実際に創立者からの贈り物などを見た時の感想が、今も印象深く残っているなどの回答もあった。

e. 学園生活の中で特に印象深いことをあげるとしたら、なんですか。

この質問は、行事や友人関係、創立者との出会いなど、本人にとって一番印象深いものを回答してもらったこととした。

「先生が卒業の時にお茶室に来ていただいて、こうお話くださったんです。『魂魄ここにとどめしだよ。どこにいても、どういうふうになっても、この学園時代に学んだこと、学園で自分が魂をこめて培ってきた事を一生の宝にしていくんだよ。みんなに卒業のはなむけの言葉を作ったよ。』これが、『園子よ／いかなる厳しい生活と／社会の中にあっても／蓮華の花の如く／美しき心だけは／絶対に勝ち取れ』という1期生への言葉でした。」（Aさん）

「第1回の希望祭のときに、先生が来て下さったときですね。48年9月14日だったと思いますが、まだまだそのときは（先生のことが）分かっていなかった、すごさ、大切さ、どうやって先生をお迎えするかがわかっていなかった。でも自分でいろんな機会を与えてくれたのに、わかっていないから、動けなかった。最初、編集委員なので、豆記者として、腕章をつけて先生に取材することができる立場にあったのに、違う部門をやりたくて、断ったこともあるんです。今思えば、苦い思い出ですけど。」（Bさん）

「初めてお迎えしたのは（1974年）10月の第2回希望祭。当時、編集委員をしていて、創価女子新聞を作っていた。思い出に残っているのは、翌年の高校2年、1975年の第1回健康祭。当時、実行委員長をしていた。私にとっては、この健康祭が原点です。実行委員長をしていたし、第1回だったから、すご

⁽²⁾ 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会 編『希望の乙女 創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、創価女子中学校・高等学校、1974年。

い責任感を持っていた。第1回だし、先生に来ていただかないと歴史が作れないと思った。」(Cさん)
「3年の後期に級長をやり、7月の(東京の創価学園の)栄光祭に参加し、そのときに記念撮影をしてくださった。先生が東京校の男子高校生に指導されるのを見て、師弟だなと感じた。私たちはお父さんだけど、それでは駄目だな。もっともっと弟子として師匠を支えていける自分になりたいと思った。『どんな環境の中でも勉強することが大事。子どもにバカにされる人生ではいけない』と厳しい指導をされた。」(Dさん)

「1981年、高校3年の第2回蛍友祭のとき。3年間自分が自問自答していたこと、『自分にとって、池田大作と言う人は何なのか?』という問いに、『人生の師匠』なんだと、すっきり解消できたのがこの行事だった。」(Hさん)

Aさんは、創立者が卒業時に1期生に贈った言葉⁽³⁾について、その当時のエピソードを語ってくれた。Bさんは、第1回希望祭について、当時の自身が創立者をどう受け止めるか、またどう求めるかについての葛藤を語ってくれた。Cさんは、第1回の健康祭で実行委員長をしたときのことを語り、Dさんは、東京の創価学園に行ったときに、第9回栄光祭で池田が男子学園生に指導する様子を見たことが、師弟のあり方を考えるきっかけになったと述べている。Hさんは、第2回蛍友祭が印象に残ったと述べている。これらの回答を見ると、それぞれの印象に残った事柄は多種多様なことがわかるが、どれも創立者に対して、フォーカスが向けられている点が共通項といえる。学園生活において、創立者との出会いや、彼をどのように自身の人生に位置付けるかが大きな着目点となっていた様子が示唆された。

② 今から振り返ったときの学園生活の意味を明らかにする質問

この②に含まれる質問は、現在の自分からの視点に着目した項目である。単純に当時の学園生活の記憶・感想について語ってもらう①の質問項目と異なり、過去の経験をふり返ってみてどうだったかという評価的側面も加味している。

a. 今となって学園生活はあなたにとってどのような意味をもっていますか。

この質問には、多くの対象者が「創立者とのつながり」「友情」について言及した。また、どの対象者も熱弁をふるって回答してくれた質問でもあった。

「あの3年間で先生との原点を作らせていただいた。あと、3年間で得た友人はすごく大きい。師匠は師匠としてももちろん大事だし、家族も大事だけど、それは別にして、どれだけ良い友人がいるかによって人生は違うんじゃないかと思う。『友情』というのは、とても大切だと思う。良き友人を3年間で得られたことは大きいと思う。」(Bさん)

「自分の生きていく方向性が定まった。常に先生の存在を、自分の人生のど真中に入れて、常に第一線で生きていく気持ちが定まった。また、どこに行っても、すぐに当時に戻れる。そういう友だちを持たたのは宝。学園に行っていなかったら、そこまでの友だちを作れたかなと思う。」(Dさん)

「精神的には決定的な意味を持っていた。自分の人生に大きな影響を与えた、人格形成、進路を決めた3年間でした。人生の師匠とのつながりという意味で、10代にあれほど強いつながりを持つことができ

(3) 「創立者ととともに」編集委員会 編『創立者ととともに』学校法人創価学園、1982年、408頁。

た、これはやっぱり大学と言うよりは高校でつながりを持てたことは大きい。」（Eさん）

「すべての財産ですね。この3年がなかったら今こんな感じじゃない、もっといやな女になっていると思う。創価大学にも来ていなかったんじゃないか。入学前はバリバリとがっている女性にならねばと思っていたから。でも、学園に入って、次第に角が取れていった。またあとで、女性としてとんがって生きるよりも、女性らしさを失わず、力を発揮する、そっちの方が難しいことがわかった。学園でできた友人、つながりがここまでできるとは思わなかった。先生とつながっていれば何もこわくない、これは根拠のない自信なのですが。でもそれが学園生の強さなのかも。きっと大丈夫と思っている、前に進める力をもらった。」（Fさん）

「やっぱり、3年間の中で先生とのいろんな出会いを作らせていただいたことが大きいと思います。」（Gさん）

「人生の黄金の基礎を作らせてもらった。その基礎の上に、創価大学に来て、学生時代に創立者からベツチェイ対談の本⁽⁴⁾をいただいたのですが、それを読んで、先生を中心とする一大平和勢力の一員になりたいと、具体的な目標が決まった。」（Hさん）

「卒業した後、21歳くらいまで私はいろんな体験をすることになった。父の会社が倒産したり。でも、すべてを失っても、『学園生だった』という誇りだけはあった。これがあったから立ち上がってこれたというのがある。自分にとって原点よりももっと重い、魂そのものみたいな核を持つことができた。その一点だけで、絶対負けられない、はずれてはならない、また先生を裏切れないという思いがある。この3年がなかったら、違う人生を歩んでいたと思う。」（Iさん）

これらの回答を見ると、それぞれ「先生との原点」「先生の存在を、自分の人生のど真ん中に入れて」「精神的には決定的な意味」「すべての財産」「人生の黄金の基礎」と、どれも表現は異なるが、創立者とのつながりがその後の人生において大きな意味を持ったであろうことを示している。特に最後のIさんに関しては、「学園生だった」というアイデンティティが、後に困難な状況に陥ったときに自身の精神的支えとなっていたことを語っており、創価女子学園での経験が卒業生のアイデンティティ形成に多大な影響を与えている点が示された。一つの私立高校にすぎない創価女子学園ではあるが、ここまで各卒業生が学園生活の価値を大きくとらえ、その後の人生における決定的な経験としているのは特筆すべき点であろう。そこに、学園を創立した池田の教育思想や池田と学園生とのやりとりが大きな影響を及ぼしていると考えられる。

b. もし、高校1年生に戻って、学園生になるとしたら、また学園生になりたい（学園生活を送りたい）と思いますか。

この質問には、即答で「はい」と回答する者もいれば、「もう一回やり直したいというのはない」という回答もあった。

「はい。もう一度学園生になりたいと思います。」（Aさん）

「はい。勉強とか、やり残したことがいっぱいありますから。」（Bさん）

「また学びたい。学園生活は学んでいる最中よりも、卒業してから、歳をとるごとに、その価値が感じられてくる。今は学園に行かせてくれた両親にすごく感謝している。」（Dさん）

「また学園生になりたい。やり直したい。」（Eさん）

⁽⁴⁾ 池田大作、アウレリオ・ベツチェイ『二十一世紀への警鐘』、読売新聞社、1984年。

「学園生になりたい。今度はちゃんと勉強したい。」(Fさん)

「また戻りたい。私が入った時は、中学から上がってきた人たち(中学1期生で高校4期生の人たちのこと)がいて、すごく性格がはっきりしていて、何だか圧倒された。個性が強い人が多かったという感じでした。」(Gさん)

「もう一度なりたい。今度はもっと勉強したい。もっとすればよかったと思う。自分はどうやって生きていこう?師弟とは何か?とたっぷりそれだけを考えた3年間だった。」(Iさん)

「私は今までの人生に一つも悔いはないと思っています。だから、もう一回戻ってやり直したいというのではない。自分なりに一生懸命生きてきたから、もうこれ以上のことはできないから、やり直す気力はないです。」(Cさん)

「そうですね、あんまりにも大変だったので…悩みの連続だったので、一回の輝く思い出でいいかなって気がします。」(Hさん)

対象者9名中7名が「もう一度学園生になりたいと思う」と答え、2名が「もう(学園生活を)やり直さなくていい」と考えていることが分かった。回答をよく見ると、「もうやり直さなくてもいい」と考えている対象者は、その学園生活を二度と繰り返したくない嫌な経験と言うよりは、悔いなくやりきった一つの完結している経験と見なしており、すでに十分な達成感・満足感を感じているために、もう一度同じ学園生活を送ることに未練がない状態なのではないかと考えられる。

c. 今になって思う自身の学園生活のよかったところ、反省点はありますか。

この質問では、学園生活でよかったと感じた点、本人が打ち込んだことなどを語っていただいた。良かった点については、回答は以下の通りであった。

「多くの友人に出会えたり、先生に何回もお会いできた。」(Bさん)

「友だちと知り合えたこと。」(Fさん)

「寮に入っていた。寮生活はすごく勉強になった。」(Cさん)

「行事が多かったですから、行事のたびに、姉妹学級があり、一体になって取り組みました。ある意味、教員の先生たちにとっても何もかもがはじめてだったので、一緒になって連帯を作っていたと思います。」(Aさん)

「何をすることも真っ白な状態だったので、のびのびといろんなことに挑戦できたこと。例えば、応援団は学ランを着て、白ハチマキしめて団長をやったりしました。まだ伝統ができあがっていなかったから何でも自分たちで手作りという感じでした。」(Dさん)

「女子高だったので、女性についての先生のスピーチを繰り返して学びあえたこと。」(Iさん)

「片道2時間かけて無遅刻・無欠席で通ったことが自信になっている。朝5時半に起きて、家が出るのが6時半。鍛えられたと思う、身体も精神も。あとすごく悩んだのでそれがかえってよかったと思う。そういう時期を経ないといけないだろうし。」(Eさん)

回答を見ると、寮生活などを通して「友人と知り合えたこと」「創立者との出会いが作れたこと」があげられた。特に、Bさんは、在学中3年間のうちに創立者が13回来校されたと述べていた。さらに、開校間もない草創期のためか、「行事などに一から自由にのびのびと取り組むことができた」点があげられた。また今回、インタビューで分かったことであるが、対象者のDさんとEさ

んは、通学生であったが、通学に片道2時間をかけていたにも関わらず、2人とも3年間、無遅刻無欠席を通したということである。このように、「遠方からの通学によって自身を心身ともに鍛えることができた」という観点も見出すことができた。

反省点についての回答は以下の通りであった。

「先生が偉大な師匠だというあたりがよくわかっていなかったのもっともっと求めて、祈って、戦ってあげばよかった。本当に何もわからなかった。」（Bさん）

「悩んだことと表裏一体ですが、自分の中に閉じこもるところがあった。先輩との絆があまりなかった。同級生の友人はいましたが、上下のつながりがあまりなかった。寮生活している人は、（先輩・後輩のつながりが）自然にあるんだろうけど。」（Eさん）

「勉強しなかったこと。」（Fさん）

「反省点はやはり勉強でしょうか。」（Iさん）

「往復4時間通ったし、精一杯悔いなくやったと思う。4つの電車を乗り継いで通っていたんです。でも、学園に行きたい思いが強かったから、苦にならなかった。これ以上やられても、できない。」（Dさん）

学園生活のどの部分について、反省点、また改善すべき点を感じているかに着目したが、「創立者の自身の位置づけに対する迷い」についての回答がみられた。これは、後になってふりかえて初めて分かる過去の自己についての分析といえるだろう。また、「先輩との人間関係」「勉強」などの回答が見られた。また前述したように遠距離通学をしていたDさんに関しては、悔いなくやりきったので反省する点は特にないとの回答を得た。

d. 今も心に残っている創立者の指導があれば、教えてください。

この質問については、入学式や希望祭など公式の行事のときに池田が残したスピーチという形でだけでなく、来校の際の学園生との交流の中で出てきた言葉なども含めた。以下の多くの回答が得られた。

「帰宅の時に、『みんな10円玉持っている？』と聞かれて、『今から家に電話をするんだ。親に心配をかけることが大切だ』と話してくださった。このことを通して、人を思いやること、自分の身を守ること、大切にすることを学んだ。『娘は絶対お父さんに向かって叱ったりしてはいけない。お父さんにとっていい娘になって行くことが大事。』という話もしてくださった。」（Aさん）

「『女性が仲良くすること自体が革命なんだ』とおっしゃったことがあった。」（Cさん）

「卒業の時に、先生と生きていきたい、大変な人生だろうけど、と決意を決めた。先生の『学園生は絶対に不幸にはならない』という言葉が心に残っている。『こんなに福運のある子たちはいない』と教員も思ったという話を聞いたことがある。」（Cさん）

「赤軍派のテロリストの父親の話をされて、自分はどんなことがあっても、娘を抱き抱えてあげたい、私も同じなんだよ、と言われたこと。あと、1期生の卒業式の時、『お父さんは、今日は泣きません』と、先生が顔をこぼらせて言われたのが忘れられない。」（Eさん）

「先生は女子にすごくやさしかった。何があっても守るよっていう。赤軍派の人の話があった。男子には力をつけなさい。私たちには『力よりも福運をつけなさい』と言われた。この方が難しい、つけようと思っても目に見えないし、勝負するところもない。男子には『勝て』と言うのに、女性は『幸福博士

に、負けない人生』ということを言われた。それを聞いて、女性には力以上のものを求めていらっしやるなと感じた。」(Fさん)

「赤軍派の重信房子のスピーチは衝撃的だった。父は娘を守りたい。娘がどんなになっても、応援して守っていくという姿勢を教えてください。」(Gさん)

「『人は隣の芝生が青く見えるものだけど、そうじゃない。自分が今いるところでなくてはならない人に、その人を幸せにすることが大事』という話が会食会であった。」(Dさん)

「高校3年のときの栄光祭のときの先生の指導。先生の記事が週刊誌にも書かれていた時期だった。でもそのときに、『私のことはどんなに書かれても何とも思わない。私には雲のごとく人材がいるんだから、幸せだ』という話をされた。先生がそんな思いで期待してくださっている、先生にお伝えしていきたいと思った。」(Dさん)

「(第3回)入学式のメッセージで、与謝野晶子の話があった。それまでは(与謝野晶子に対して)エキセントリックな人と言うイメージがあった。でも先生は、与謝野晶子は多くのお子さんを育てて、手作りの童話やお菓子を作ったりと、母として妻として心豊かに生きていた女性だったんだという話をされた。何でもない日常をきちんとできることが女性として大事であると語られた。」(Fさん)

「『有名な人よりも力ある人。力ある人よりも福運のある人』にという言葉が心に残っている。」(Fさん)

「福運が大事だという話をされた。何を運んで人生を過ごしていくのかという話が心に残っている。」(Gさん)

「『頭が良くて幸せになれるとは限らない、だから福運をつけることが大事』という話があった。」(Dさん)

「先生がよく繰り返されていたのは『金の思い出を持つ人は天女 悪の思い出を持つ人は魔女』という言葉。若い時にどんな思い出を持つかで、女性の人生は決まってくる。歳をとるにつれて、本当にそうだなと思う。先生にそこまで育てていただいたことは、今ずしんと重く残っている。」(Eさん)

「卒業のときにいただいた『生きゆく／力を持つ人は／常に強く／常に感謝ある人は／幸なり』という言葉です。」(Hさん)

Aさんの語りに見られるように、創立者の女子学園生に対する指導のひとつに、「親に心配をかけてはならない」というのがある。池田は、昭和53年(1978年)の創価女子中学・高等学校の寮生との懇談会において以下のように述べている。「きょう一つだけ申し上げておきたいことは、『人に迷惑をかけない』ということでもあります。皆さんにとっては、お父さん、お母さんに心配をかけないことが迷惑をかけないことになります。仏法では、親の恩、師の恩を忘れてはいけなくて、説いています。親を馬鹿にしたり、反抗したり、蔑んだりしてはいけません。それは畜生にも劣るのです。皆さんは、親に迷惑をかけてはいけません。先生に迷惑をかけるのもあまりよくありません。それでは一生、幸せになれない。」⁽⁵⁾ この指導から、「親を大切に」との創立者の強い思いを読み取ることができる。

Cさんの語りの中で出てきた、『学園生は絶対に不幸にならない』という指導は、過去の指導を見ると2回にわたって見ることができた。ひとつめは、1976年の全校集会での話である。池田は、創価学園が友人同士の啓発などの観点から理想的な学園であることを述べたうえで、以下のように述べている「この学園で学び、この学園で育った人は、大学へ行く人、就職をする人、または、自分自身の家庭で励む人等々、多種多様であるかもしれないけれども、学園出身ということは聞

⁽⁵⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、281頁。

違いない事実です。人生において最高に大切なときにこの学園で育った学園生が、不幸になるわけがない——こう確信していただきたいのであります。」⁽⁶⁾ ふたつめは、1978年の第6回希望祭における指導であり、池田は園遊会の席で「何度も何度も申し上げましたが、学園生が、社会に出て、やがて結婚し、一生涯、この大事な尊い人生で、不幸になるわけは絶対にありません。ですから、多少成績が落ちて落胆しないで、また先生方に叱られても落胆しないで、三年間、六年間、また、卒業する人はあと半年ですが、頑張ってください。」⁽⁷⁾ と語った。これらの指導を見ると、創立者の思いとして、自分の学園に集った学園生に対して、「絶対に不幸にならない」との強い確信が感じられる。また、Cさんが語った『こんなに福運のある子たちはいない』と教員も思ったという話については、同じく第6回希望祭のスピーチにおいて、池田の語った以下の言葉がそれにあたるであろう。「さきほどある先生がみえて『学園で育った人は幸せだ。こんないい場所はどこにもない』というように述懐しておられましたが、あとになればなるほど、学園で学んだことが、自分自身の最高の思い出と福運になっていることだけは、信じていただきたいのです。」⁽⁸⁾ これらのスピーチを読むと、池田が創立者としての温かい慈愛を持って女子学園生に接しているだけでなく、彼らが一生を通して幸福になっていくことを強く念願している様子がうかがえる。

E, F, Gさんの3人の語りの中から、赤軍派の重信房子のスピーチについての話が出てきたが、これは1978年の創立5周年記念昼食会での話がもとになっていると思われる。池田は、学園生の人生について「人はそれぞれどんな宿命、運命を背負っているかわかりません。女性はある面では受身の人生を歩むかもしれない。しかし私は、学園生はどこへ行っても、どこでどのような生き方をしても、どういう結果になったとしても、ぜんぶ心の中に通じるように抱きかかえてあげたい。どのようになっても、私は学園生だけはかばってあげたい。ただ一人私だけは一生涯どのようにいわれても、皆さんの最大の味方です。あの学園生はだめだったとはいいません。全員、心の中に入って、その人をかばってあげたい。それが、私のいつわらざる心情です」⁽⁹⁾ と語った。このスピーチからは、池田の一人ひとりの学園生をどこまでも生涯守りぬきたいという、創立者としての深い慈愛が感じられる。この話を実際に聞いた対象者たちはその当時のことを鮮明に覚えているようで、そこまで池田が生徒の前で心情を吐露することが驚きであったとともに、創立者の深い思いを感じたと語っていた。

Dさんは2つの指導について語ってくれたが、1つめの語りは、1976年の生徒代表との懇談会での、池田の以下の指導に見られる。「人というものは、どうしても他人が良く見えるものです。他の環境が良く見える。あこがれてしまう。それは錯覚です。夢というものは、どこまでいっても夢である。現実というものは、どこまでいっても現実である。この点に、とくに若い人たちは、大きい狂いを生じてしまう場合がある。したがって、あの学園、あの学校、あの家庭はいいなあ、

⁽⁶⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、274-275頁。

⁽⁷⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、291頁。

⁽⁸⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、292頁。

⁽⁹⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、284-285頁。

などと思うことよりも、自分の人生が、自分の今いる所が一番大切なんだ、そこしか真実の幸福の花を開いていく所はないんだと、決心することが大切です。自分の今いる所以外に幸福は求められない。自分が今いる所で挑戦する以外に、偉大な黄金の人生はないのです。」⁽¹⁰⁾ この指導からは、今いる場所で戦うことが幸福への近道なのだという観点と、人と比較するのではなく、自分らしく自分の人生を生きていくことの重要性が説かれていることがわかる。2つめの語りは、第9回栄光祭のときの指導に見ることができる。池田は、「私自身は、たとえどのような悪口、雑言、中傷、批判をされてもなんとも思いません。なぜか。私には学園生がいる、創大生がいる、人材がいます。つぎに続く何千何万という優秀な若き人材が、雲の湧くごとくいるんです。だから、私は日本一、世界一幸福者であると自負しています。」⁽¹¹⁾ と語っており、ここに池田の創業者としての学園生に対する、揺らぐことのない大きな期待や絶対の信頼感を読み取ることができる。

Fさんの語りの中で出てきた与謝野晶子については、第3回入学式のスピーチに見ることができる。池田は与謝野晶子について、彼女の歌人としての活躍や、文筆者としての生き方にふれながら「私が注目したいのは、こうした彼女の、男にもまさる勇気と才能豊かな活躍が、11人もの子供を育て、家計のやりくりで苦労しながらの庶民の日常生活の地平から発しているということであります」⁽¹²⁾ と述べている。「しかも彼女は、子供たちには、手作りの菓子を与え、やんちゃ盛りの子供の着物を縫い、洗たくし、自作の童話を語って聞かせるというように、母親としても見事な姿を示しています。ごうごうたる世間の非難や圧迫、経済苦にも一歩も退かず、愚痴もいわない強さの半面に、この心やさしき、豊かな情感——その生活は貧しくはあっても、愛情に満ちあふれ、心の綾に美しく彩られていたことでありましょう。彼女はけっして環境に甘えてはいなかった。邪悪なものや戦い、自己の内に豊かなものをたくわえ、それを赤々と燃やし続けて、人間らしく生きようと努めたのだと思います。」⁽¹³⁾ と、与謝野晶子の母としての一面を紹介しながら、「結局は、女性であるとともに、一人の人間としての『芯』を確立していくことこそが大切になってくるということであります」⁽¹⁴⁾ と結んでいる。与謝野晶子という一人の女性を紹介しながら、池田が女性としてのあり方や母としての豊かさのひとつのモデルを女子学園生に示そうとしていることが感じられる指導である。

次に、FさんとGさん、Dさんの3名の語りの中からは、共通して「福運」というキーワードが見られた。福運については、池田はことあるごとに女子学園生に対して「福運・福德のある人に」という言葉を残している。第3回入学式においては、『幸いは心より出て我を飾る』という格言がありますが、自分を深く耕して、人間としての力、奥行きと広がりやを培い、わが身の中に、人から敬愛され、守られ、また一切の環境を切り開いていける『生命の財産』ともいべき福運

⁽¹⁰⁾ 「創業者とともに」編集委員会 編『創業者とともに』、276頁。

⁽¹¹⁾ 「創業者とともに」編集委員会 編『創業者とともに』、181頁。

⁽¹²⁾ 「創業者とともに」編集委員会 編『創業者とともに』、237頁。

⁽¹³⁾ 「創業者とともに」編集委員会 編『創業者とともに』、237-238頁。

⁽¹⁴⁾ 「創業者とともに」編集委員会 編『創業者とともに』、238頁。

を、築いていってほしいのです。」⁽¹⁵⁾とあるように、女性の持つべき特質の一つとして福運・福德というものを重視している。Gさんの「何を運んで人生を過ごしていくのか」という語りは、1977年の創立5周年記念式典における池田の指導に見ることができる。池田は、学園生に対して申し述べたいこととして、「福運」について言及した。彼は、「福運というのは字義のごとく『福を運ぶ』とも理解できます。生命の運河に、何を運ぶかが大切です。人によっては、地獄の苦悩を運ぶ人もいます。また、小さな舟に重き宿命の荷物を背負って、やがて沈没してしまう人もあるかもしれません。願わくは、私は皆さん方には、偉大なる生命の船舶に福運をつんで、人生の航行をしていっていただきたいのであります。そのためには、何が必要でありましょうか。それは、明るく太陽のような満々たる生命力と、明朗な笑いと、ふくいくたるわが青春の財産をはぐくんでいくしかありません。」⁽¹⁶⁾と述べ、人生における福運の重要性を『福を運ぶ』というたとえになぞらえて、わかりやすく学園生に示した。

Hさんの語りは、創立者が7期生に贈ったことば⁽¹⁷⁾に見ることができる。彼女にとって、卒業のときに創立者からいただいた言葉が生涯の指針となっていることがうかがえた。

・「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という指導について

また、今回ほとんどの対象者が印象に残った創立者の言葉としてあげていた「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という指導について詳しくみていきたい。池田は、第1回入学式のスピーチにおいて、地球上の最大の問題は平和の危機であることを指摘したうえで、その危機の本質は社会的な原因や民族問題、経済問題というよりも、「人の心の波動が、さまざまな善悪の社会現象を生んでいく」のであると、平和構築における一人の人間の精神性に着目している。これをふまえて、池田は「ここに思いをいたすとき、やがては皆さんもこの学園から巣立ち、一人の女性として、立派な社会人として、社会に影響を与えていくことになるであります。そこで、私がいまから皆さんに望むことは『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という信条を培っていただきたいということであります。」⁽¹⁸⁾と述べている。さらに、「皆さんのささやかな実践は、そのまま人類の平和への軌道に通じないわけではないからであります。かくて、平和の真の戦士の卵が、この学園から陸続と育ていっていただきたい。これこそ女性の生涯を崇高にする唯一の信条であることを、私は信じて疑わないからであります。」⁽¹⁹⁾と強調している。

「第1回入学式のスピーチにある『他人の不幸のうえに、自分の幸福を築くことはしない』これを信条に、とずっとしてきました。それが一番でしょうかね。」(Bさん)

「『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という指導は)入学式の『猿』の話、また『良識・健康・希望』という3モットーとともに、とても印象に残っている指導です。」(Aさん)

⁽¹⁵⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、236頁

⁽¹⁶⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、245-246頁。

⁽¹⁷⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、411頁。

⁽¹⁸⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、225頁。

⁽¹⁹⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、226頁。

Aさんの語りに出てきた躰の話は、第1回入学式のスピーチにおいて、池田が示した「伝統」「平和」「躰」「教養」「青春」という5つの指針のうちの一つである。池田は、若いうちからきちんと躰を受けることが大切であり、また頭ではなく体自体で生活のリズムやルールを体得していくことが必要であると述べている。「皆さんは、私が未来をかけた誇りある女性であります。若き女性を陶冶する学園の生徒として、日常、反復して訓練されるであろうさまざまな躰をきらわないうことを私は望みます。どうか、皆さんの身に、よい躰系がかかりますように、そして本番の人生の縫い上げが立派で、見事でありますことを心より願うものであります。」⁽²⁰⁾という言葉に見られるように、よりよい人生のための訓練としての青春時代の躰の重要性を訴えている。

他にも、「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という指導について、以下の語りが見られた。

「あれはやっぱりすごく重い。平易なことばだけど、これが、女性の人生を崇高にして、平和構築の原点であるという点、ここに女子教育の原点があると思う。」(Cさん)

「先生の数々の言葉から『心を常にきれいにしていないといけない』というのは影響された。女性が3人寄ったら仲良くするのは難しいけど、『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という信念でいけば、理想的な学園ができることを教えてくださった。崇高な生き方って何だろうって思った時に、一番の理想の形を10代のときに教えていただくことができた。これで人生の方向性が定まった。」(Eさん)

このようにCさんやEさんの語りからは、この言葉を「女子教育の原点」や女性のあるべき生き方の中核に位置づけるという志向性を見ることができる。

「85～93年までヨーロッパに留学していましたが、あちらは文化が異なるし、血で血を洗う世界だから、学園時代に示していただいた、『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という指針が通用するのかというジレンマがあった。でも今、東洋哲学研究所で働く中で、ソフトパワーが何よりも大事であり、『他人を不幸にしない』という生き方が人類最大の公約数になるであろう信条であることを、実感できた。最近になってやっとその言葉の深みを理解することができた。」(Hさん)

Hさんの語りからは、自身の留学経験を通して、異なる文化圏でも池田の思想が通用しうることを実感できた経験が見られた。本人も研究者としての視点から池田の思想を再評価し、新たな認識を加えている点が見受けられた。

・恋愛や結婚に対する指導について

また、女性に対しての指導ということで、関西創価学園卒業生の会である蛍会の集いにおいて、池田が恋愛や結婚について指導したことに関する語りが見られた。

『女性は賢くないといけない、自分の身を大事に守らないといけない』と、細かいところまで教えてく

⁽²⁰⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、227頁。

ださった。」（Bさん）

「蛍会の会合があって、白ゆり合宿所で、先生が卒業生に対して結婚や恋愛について、また女性の生き方について話をしてくださったことがあります。『愛情よりも経済力が大事なんだ』『女はばかで男はずるい』という話がありました。」（Gさん）

「先生が蛍会総会で話された恋愛・結婚についての話。『結婚は親から祝福されること、また第三者の意見を聞くことが大事だ』という話があった。女性にとって結婚は通過点の一つにすぎないかもしれないが、人生が大きく変わる一つの機会でもあるし、大切な指導だと思った。」（Iさん）

これらは、当時の蛍会総会のスピーチに見ることができる。蛍会（結成当初は表記が「螢会」となっている）は創価女子学園の卒業生の会であり、1975年に結成された。池田は、会の由来について「皆さんの同窓会について、先生方とも、相談したのですが、『螢会』という名前にしてはどうでしょうか。それは、数ある有名校といわれる学園の中で、螢がいるような所はどこにもありません。この学園以外はないからです。『ほたるの光・窓の雪』という歌がありますが、この歌にこめられた求道心ということも含めて、毎年毎年一生涯、卒業生とまた私もできる限り螢会でお会いして、この尊い人生を、一生を世界最高に充実させながら、生きていていただきたいことを念願しております。」⁽²¹⁾と述べている。螢のいる学園に象徴される自然豊かな教育環境や、歌に出てくる「ほたる」に象徴される求道心という観点から「螢会」と命名したことがうかがえる。

恋愛については「お付き合いをするときは、両親に、こういう人とお付き合いしたいと思いますが、何かあったときには応援してください、とっておくのです。そうすればいざというとき守られるものです。その人を愛してしまって捨てられたら、それこそ、一生不幸です。だからその人が本当にいい人であるかどうか、第三者にみてもらうのが賢明です」⁽²²⁾と語りながら、とすれば恋愛において冷静な判断が困難になりがちな女性に対する現実的な指導を行っている。また結婚についても、恋愛と同じように「お母さん、お父さん、または良き先輩の意見を聞くことが大切です」⁽²³⁾と語り、恋愛や結婚において、二人だけで決めるのではなく、必ず第三者の意見を入れることの重要性を訴えている。また結婚相手の条件として、「相手に経済力があるかないか、その見通しがあるかないか、これが一点。その上に、またはそのもとに愛情が必要です。それがあって理解し合っている。お互いに尊敬というか、信じ合った理解ができる。こういうことが、現実に成り立たない場合は、私は、夫婦の安定した長い人生というものは成就できないというふうに思います。」⁽²⁴⁾と、経済力と愛情および相互理解が必要であると指摘している。これらの言葉は、結婚を夢ではなく現実の生活とみるうえで非常に明解な指導といえよう。この指導の根底には、男性に比べて身体的・社会的にも弱い存在であり、結婚によって生活形態を大きく変える必要性が生じる可能性が高い女性を少しでも守りたい、少しでも幸せな人生を送ってほしいという創立者の願いが表れているといえるのではないだろうか。

(21) 創価学園螢会 編『この道—螢会総会創立者指導—』、1985年、1—2頁。

(22) 創価学園螢会 編『この道—螢会総会創立者指導—』、4頁。

(23) 創価学園螢会 編『この道—螢会総会創立者指導—』、6頁。

(24) 創価学園螢会 編『この道—螢会総会創立者指導—』、6頁。

創価女子学園の草創期の特徴の一つとして、創立者を父のように慕うという点が前回の井上の論文でも見られた⁽²⁵⁾。創価女子学園の草創期について書かれた書籍には、生徒は、創立者の池田を「おとうさん」と呼んで慕っており、池田も女子学園生のことを娘のように可愛がり、温かい慈愛で包んでいたという記述がみられる⁽²⁶⁾。男子校である東京の創価学園では、創立者と生徒との関係は「師匠と弟子」という形でとらえられ、「おとうさん」という観点からはほぼ見ることができないということを考えると、この「父と娘」の絆は、いわば創価女子学園独自の伝統であったと考えられる。今回のインタビューにおいても、「先生を『おとうさん』とよぶこと」について追加の質問をしてみたところ、以下のような回答を得ることができた。

「共学になる前の10年間は、先生もご自身のお子さんは男の子しかいらっしやなかったから、娘のように接してくださった。『おとうさん以外の何者でもない』という感じだった。」(Aさん)

「そうですね。私は最初がよくわかんなかったから、ギャップがあったけど。本当にお父さん、って思っていた。先生との距離が短かった。逆に、先生が本当に師匠なんだ、というところに持っていくのは、高校卒業してからだったが、それは少し大変だった。」(Bさん)

「『星に誓います』の歌について)先生との距離感が、東京と関西は違うと感じた。先生に慈悲の部分を感じる存分いただいたという感じ。」(Cさん)

「先生が私たちのことを『園子』と言ってくださって、私たちは『おとうさん、おかえりなさい』という感じでした。先生の『娘のために何でもしてあげたい』という思いが伝わってくる。」(Dさん)

「行事のときのたれまくにも『おとうさんおかえりなさい』と書いていました。東京校は質実剛健、師弟と言う感じ。私たちは娘だった。ホントに可愛がっていただいた。」(Fさん)

「(先生とおとうさんと呼ぶことについて)最初、私もびっくりした。違和感があった。先生と自分を見つめる、日々命に刻む3年間だった。先生のことをわかりたい、近づきたいと思って、新聞に出ているご指導を毎日切り抜いてノートを作ったんです。これは10冊くらいになったんですが、今でもとってあります。」(Gさん)

「先生をお父さんと呼んでいた。(「星に誓います」の歌を)全員で歌うんです。」(Iさん)

「先輩のことはお姉さん、先生・奥様はお父さん・お母さんと呼んでいました。私は下宿していましたが、3組のお父さんお母さんがいる(実の父母、寮の父母、先生・奥様)と言っていました。」(Cさん)

これらの語りを見ると、創立者の女子学園生に対する思いが、まるで実の娘に対するようなものであったのだろうと推測できる。Aさんの語りにあるように、池田には息子が3人生まれたが、女兒には恵まれず、その分女子学園生を実の娘のように可愛がっていたであろう。また、そうした池田や妻の香峯子夫人の親心が、しっかりと生徒たちにも伝わり、創立者と生徒の関係が、学校という一つの教育機関としては非常に珍しいといえる「父と娘」の絆の形成となったと考えられる。学校の創立者に対して、生徒がここまで近い気持ちや親近感、親に対するような愛情と尊敬の念を持って接することはなかなか可能なことではない。これを可能ならしめたところに、創価女子学園の一つの思想的独自性が存在していたとはいえるのではないか。また、このような強い絆を創立者と一人ひとりの生徒が持つことができたという体験がおのおのの卒業生の中にあ

⁽²⁵⁾ 井上比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から(1)—」、66頁。

⁽²⁶⁾ 関西創価学園 蛭会『この道—希望と栄光の歴史—』、2006年；創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会 編『希望の乙女 創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』。

ることが、対象者にとって学園生活を人生の1つの過程として大きく価値づけた要因の一つとも考えられる。

e. もし子どもができたなら、学園に入りたいと思いますか（もしくは、もうすでに入学させていますか）。

これは、創価女子学園での経験が、その後の子育てにも影響を与えているのかを問う質問である。自分の子どもにも同じ教育を受けさせたいと思うのか、またその理由は何なのかについて以下のような回答を得た。

「娘2人を創価の学び舎に送り出しています。」（Aさん）

「入れたいと思う。娘は関西学園から創価大学に進みました。」（Bさん）

「はい。長男と二男は創価小学校から入れました。三男も学園に入れたいと思う。」（Cさん）

「長男の時は迷わず、先生がお元気なうちにお名前をつけていただきたい、と思った。学園にと思って入れました。」（Dさん）

「（もし子どもがいたら）無理やり入れさせることはしないけど、自分から行きたいと思わせるようにはしたい。動機が大事だと思う。」（Eさん）

「実際に上2人を入れている。下の子も来年の中学受験を目指している。」（Fさん）

「もう入れています。池田先生のもとにというそれだけです。」（Gさん）

「創立者に縁させたいという思いがある。息子も、創価学園に入れて先生との絆を作り、人生を拓いていきたいと思っている。」（Hさん）

「3人とも創価小からお世話になっています。自分を支えてきたのが、学園生と言う一点だった。一貫教育がいいのかはわからなかったですが、とにかく先生がお元気なうちというのはありました。」（Iさん）

驚くべきことに、今回対象者9名中全員が「子どもを学園に入れたいと思っている」もしくは「すでに入れている」「創価学園の入学を目指している」と回答した（うち1名は子どもがいないが、「もし子どもがいたら）入れたいと思っている」と回答した。）。対象者たちが、自身の受けた教育を高く評価しており、特に創立者との関わりを重視しているという点が共通点として見出された。また、創立者が健在なうちに入学させたいとの強い思いが感じられた。

③ 女子教育についての質問

③は、女子学園での生活をふり返って、対象者の目から見た女子教育に対する評価とともに、女子教育を通して培った「何か女性にとっての幸福なのか」という幸福観、また「創立者はどのような女性に成長することを望まれているのか」という理想の女性像についての問いである。

a. （ご自身が受けてきて）女子教育の良さはどこにあると思いますか。

対象者は、ほぼ全員が小学校から大学までの教育課程の中で、共学・女子校と両方の教育形態を経験している。その中で、高校3年間を女子だけの教育環境で過ごしたということは、どのような影響を与えているのか。また、その中で対象者が感じた女子教育の良さはどこにあったの

だろうか。

「世界一の美しい友情の連帯だった。最後はそれが残っていけばいいと思います。家族は変化するもの。友人関係は一回作り上げていけば、ずっと続いていくという感じがした。」(Bさん)

「大学は共学になって違うけど、高校は高校でよかった。打ち合いとか、先生を共に求めて、という世界があった。女同士の友情の良さは経験してはじめて分かる感じ。」(Gさん)

「先生が『奇跡の連帯』とおっしゃったように、女性同士が仲が良かった。今も卒業して何年かぶりに会っても仲がいいんです。学園時代に、『人のために生きよう』というのを確立しちゃってたんだろうなと思う。その当時はわからなかったけど、人を大きく包みこんでいけるような人に、みんななっていると思います。卒業して30年以上たちますが、お互いに応援し合っている。妬むとかやっかむとか、思いつかないんです。」(Fさん)

「先生はお父さん、先輩はお姉さんと呼んでいました。あと、話し合いというのが多い。『対話』という精神の始まりは女子高ではないかと思う。」(Iさん)

「私は高校3年間だけが女子教育だった。本音で付き合える。女子が女子をほめる、たたえあう、認め合う世界。あと、何でも自分たちでやらないといけないから自立する。大学に来た時、男子が重いもの持ってくると変な感じがした。実行委員長も女子ですし、みんなが主体者という意識があったと思う。」(Cさん)

「男性がいると気を使ったり、意識したり、男性の目を気にすることがある。そこにばかり気がいくと、本来大事にしないといけない部分がないがしろになるのではないか。これが共学と女子校の大きな違いかな。女子だけで、目標に向かって、わずらわされずにできるっていうのは女子教育の良さかなと思います。」(Dさん)

「自由でのびのびとしていました。男子がいらないから、最終的には自分たちで何でもやるという気質が身についた。」(Fさん)

これらの語りを見ると、回答者自身が「美しい連帯」と表現するように、女性同士の友情が確実に築かれて行っている様子が伺える。また、Iさんの語りに見られる「『対話』の精神の育成」という観点も見られた。さらに、これは女子教育のメリットとしてよくあげられる点であるが、男子がいらないからこそ、「自分たちで何でもやる」という「自立心や主体性の育成」という観点が見られた。去年の井上の論文では文献調査を通して、女子教育のメリットとして、「女性が自分の個性や能力を伸ばしやすい」という点や「自立心・主体性を養成でき、リーダーシップを発揮できる」という点を指摘したが⁽²⁷⁾、その議論とも合致するものとなった。

また、教員と生徒との関係に関して、以下のような語りも見られた。

「(教員と生徒との関係が) すごくウェットだったと思う、これも女子高ならではのようですが。先生のスピーチを教員と学生で対話しながら一緒に勉強したりしました。創立者の話を教員の先生方から聞くこともできた。下宿にも来てくださったし。親元離れていたのも、すごく距離が近かった。本当に先生方もよく、微に入り細に入りやってくくださったと思う。男子高からいらした先生もたくさんいたが、本当に心して女子教育にあたってくださったと思う。」(Iさん)

「教員と生徒の距離は近かったと思います。校長先生もよく各下宿をまわってくださいました。」(Hさん)

⁽²⁷⁾ 井上比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から(1)—」、63—64頁。

「(教員の先生方は) 必死にやってくださっていたので、今から思えばありとあらゆることに関わってくださった。」(Fさん)

「(当時の) 永村校長先生と一緒に草刈りをしながら、終わったら万葉集を読みながら講義を受けたことがあります。また、オーケストラ部だったんですが、音楽研究室があり、宮田先生という先生が、池田先生の新刊本が出ると、例えば詩集とか一緒に読み合ったことがあります。こういったやりとりは共学なら厳しかったかも。これが普通にできたのは良さだったと思う。」(Hさん)

これらの語りから、教員と生徒の関係については、学園が創立間もない草創期であったこと、また女子校であったことなどから、教員と生徒との距離が密接で、非常に細やかな指導が行われていたであろうことが伺えた。特に下宿していた生徒にとっては、教員は「下宿のお父さん・お母さん」と並んで、悩みを相談できる相手であったことがうかがえる。また、Hさんの語りで出てきた、永村校長先生や宮田先生との自発的な勉強会は、女子教育ならではの自由で向学心に富んだ一つの課外活動のようなものといえるだろう。今回、Hさん以外の対象者からもこれらの勉強会に関する語りが見られ、どの対象者もその当時のことを懐かしく語っていた。

また、「女子教育の良さ」について聞き取る中で、「平和と女性」についての語りが以下のように見られた。

「女性は、一番平和ということを体現していけるのではないかと思います。先生の指導でもありました。男性はどちらかというと社会的なもの、強さなどが表立っている。女性は、命の大切さであったり、先生の思いを、直感で感じられる、命（いのち）で感じられるという部分がある。これは男性にない女性本来の力、心で受け止めるということだと思います。」(Aさん)

「女性は母性が強かったり、平和とか、自分とか、自分の身近なことだけじゃなく、心を強く持って連帯する、人やものを愛するという性質があると思います。それは大事なことだけど、小さくおさまると家庭内だけで終わってしまう。でも、目を大きく開きながら、その心を積み上げることが平和を拓くことにつながっていく、学園ではこのことを教えてくださったんだと思う。」(Bさん)

池田は、第1回入学式のスピーチで平和について言及しており、平和への行動や「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という信条が、「女性の生涯を崇高にする唯一の信条」であることを述べながら、女子教育における強い平和の志向性を示している⁽²⁸⁾。AさんもBさんも1期生ということで、実際にこの池田のスピーチを聞いた人たちということになる。二人の語りを見ると、やはり創立者の平和に対する強い思いが彼らに強い影響を与えていることがうかがえる。

b. あなたの幸福観を教えてください。

この質問は、回答者が答えやすいように「あなたにとって、幸福とはどのような状態をさすのだと思いますか」という聞き方に代えて回答を求めた。

⁽²⁸⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、225-226頁。

「いろんなことがあっても負けないで、自分の心を自由にしながら、環境とか自分の中の悲哀に負けずに生きていけたら幸せだと思う。環境は変化する。結婚によっても、出産によっても、変化する。そこが男の人と違う。女性は変化に対応しながら、自分らしく生きていくことができれば幸せじゃないかなと思うんです。」(Bさん)

「『女性は幸福になりなさい』というスピーチがありますが、でも何が幸福なのか、という幸福観が大事だと思います。私にとっては先生と生きていくことが幸福だと思う。お金があるとかじゃなくて。先生の弟子として生きる人生でしょうか。」(Cさん)

「先生と一緒に戦えることが幸せだと思います。」(Dさん)

「先生の弟子として生きること。絶対的幸福じゃないですけど、本当にこれが一番幸せ。」(Iさん)

「自分自身卒業してからも考え続けたことですが、人間として本当に幸福をつかむのは大切。生きる意味っていうのは喜ぶことだと思う。本当の喜びをどうやって見つけるか、学園で学べたと思う。他人の幸福のために、人のために自分が動く、このことがカギになると思う。」(Eさん)

「人に喜ばれることが幸せだと思う。相手が喜んでる姿があれば、それでいい。なるべく喜んでる場面にたくさん立ち会えることが幸せだと思う。それに関われることも幸せ。」(Fさん)

「先生は、幸福になった姿を求めているんじゃないで、幸福になるプロセスを求めておられるんだと思う。幸福の姿は何百通りもあるから。幸福を実感できることも大事。でも幸福になってゆくプロセスが大事。幸福はある意味すごく主観的なことだと思うので。」(Hさん)

「幸福」と一言でいっても、その人の持つ価値観により定義付けはもちろん異なる。対象者の語りからも様々な観点が見出された。Bさんの語りからは「自分の心を自由にする」という観点が見られた。また、「変化する環境に柔軟に対応し、自分らしく生きていくこと」が幸せであるという見解が見られた。確かに、女性は結婚や出産によっても生活環境が変わることが多く、男性に比べて常に変化する環境に適応することが要求されるといえる。その中で、柔軟性を発揮しながら「自分らしく」生きていくことが幸せにつながるという観点はBさん自身の人生経験もふまえていると考えられ、興味深い。

Cさん、Dさん、Iさんの語りからは「創業者と共に生きる」という観点が見出された。池田を生涯の師匠と定めて、池田の弟子として戦うことが幸せなのだという価値観がうかがえた。一般的な女子教育機関という目で創価女子学園をみたときに、一卒業生が、創業者のことを人生の師匠ととらえる観点は非常に稀なことであるように思えるが、対象者の語りからは、人生において最も影響を受けた人物として創業者をあげていることがうかがえる。これも、創価女子学園の特徴のひとつといえよう。

Eさん、Fさんの語りでは、「他人の幸福のために動く」「人に喜ばれること」ことに、価値が置かれていた。これに類する語りは、他の対象者からも見ることができたが、「人のために尽くす」ことが幸福につながるという価値観を持っていることがわかる。このように、「他者に対する利他的精神やそれに伴う行動の尊重」という視点は、創価女子学園の中で培われた一つの美德として、卒業後も対象者たちの人格形成に影響を与えたと考えられる。

Hさんは、幸福のとらえ方として何を重視するかにおいて、「幸福になった姿」そのものよりも、「幸福になってゆく」プロセスに価値を見出していることがうかがえた。

c. 創立者が考える理想の女性とはどのような人だと思いますか。

創価女子学園が開学してから、池田はさまざまな行事において、「このような女性に成長してほしい」というメッセージを送り続けていると考えられる。そこでいう、望ましい女性とは一体どのような資質を備えた人物なのか。精神的側面や行動面などにおける、対象者の考える理想の女性像について、彼らの人生をふりかえりながら語ってもらった。

「心が広くて、思いが深く、という人。一つは身近に教員がいた。私が知り得ない学会のこと、先生のことを教えてくださった。ああいうふうに生きられたらいいなと思っていた。」（Bさん）

『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という信条で行動する人。自分がいい思いをしてはいけないという意味ではなくて。どんなことも、自分の利益、自分のことだけ考えていたらできないと思います。地道なことだけど、この信条が一番の平和への近道だと思う。」（Cさん）

「一番は、やっぱり、心のきれいな人。芯の強い、自分自身で考える人。心は常にきれいにしておかないといろんなものがついてしまうと思います。」（Eさん）

「これから女性に求められるものってどんどん変わってくると思う。新しい女性像があると思うし、どんどん社会で貢献して、なおかつ幸福にということではないかと思う。それぞれ自らの置かれた場で、十分使命を果たしていける人がいるから、しっかりとそれを自覚することが大事。」（Hさん）

「奥様（香峯子夫人）みたいな女性、かわいらしいけど、芯が強くて、楽観主義、笑顔でまわりを明るくする女性、率直な言葉で伝えながら相手の心をほぐすことができる、先生にとっても妹、母、妻、娘である。弓と矢の話、男性が安心して任せられる。あと、健康であることもとても大切だと思う。健康で、どんな環境でも希望を作りだして、進んでいけるような人。」（Dさん）

「何でもない日常をきちんとやっていける人。奥様がそう。大それているわけじゃないけど。女性はこうした淡々とした日常をやっていける、例えば子どもを産んだり育てたり、同じことの繰り返しですが、このことが大事だと思います。その中で、自分の目指すものをきちんと心において、喜びを見出していく。壮大な目標を持っているから、瑣末な日常生活はどうでもいいというのは良くないと思います。」（Fさん）

「やっぱり知性と教養、あと信念を持つことが大事だと思います。奥様のように芯のある人、社会に開いていける人。」（Gさん）

「奥様のような女性かもしれませんね。本当のやさしさとか明るさって絶対に強くないと持てないと思う。でもしなやかな人は強い人だと思う。人に対して温かい人。明るくていうよりは、温かい人でしょうか。」（Iさん）

これらの語りから、対象者たちがどのような女性を素晴らしいと感じているか、また理想と感じているかが以下のように読み取れた。Bさんは、身近な教員に理想の女性像を見出すことができた。このように、学校の教員など身近な存在に、自分がなりたいと考える理想のロールモデルが存在するという事は、身体的にも精神的にも成長する10代の少女にとって大きな影響を及ぼすと考えられる。その意味で、草創期の創価女子学園は教員が生徒の模範となるような望ましい形態を有していたと考えることができる。

Cさんの語りからは、「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という信条に見られるように、他者との共存共栄の関係を築くことができる人という観点があげられた。

これは、前問の幸福観の質問の回答とも重なる部分があるが、利他的精神に大きな価値を置いていることがうかがえた。

Dさん、Fさん、Gさん、Iさんからは池田の妻である香峯子夫人についての語りが見られた。妻として、母として、懸命に池田を陰で支えながらも、女性らしい特質を兼ね備えた一つの理想像として香峯子夫人をとらえていることが見出された。また、Hさんからは「社会に貢献する女性」という観点が見出された。これは研究者として働く彼女ならではの視点を反映しているともいえよう。これらの回答をまとめると、望ましい女性の特質として、「やさしさ」や「明るさ」「温かさ」といった性格的な特徴だけでなく、「芯が強いこと」「楽観主義」「笑顔」「健康である」「日常生活をきちんとする」「知性」「教養」「信念を持つ」「心のきれいな人」「自分で考える人」など具体的なイメージがあげられた。このことから、対象者自身が、それぞれの立場で、しっかりと理想の女性像というものを持っていることがわかり、またそれを体現しようと努力を重ねている様子がうかがえた。加えて、「心の広い」「心の深い」「心のきれいな」という語りに見られるように、外見というよりも精神面・内面を磨くことを重視していることが読み取れた。

今回、「理想の女性」について聞き取る中で、学園にあった「希望の乙女」像についての語りが見られたので、以下に紹介する。

『希望の乙女』は、もともと『負けない乙女』の像だったんです。レインコートを着ているんです。雪にも雨にも負けないで、前に歩いていく乙女の像。卒業式の時に先生・奥様が0番、1番のブロンズ像を持っていらして、卒業生も一体一体ブロンズ像をいただいたんですが、これも一つの理想の女性を象徴しているのかなと思います。」(Aさん)

「女子学園のシンボルとして、希望の乙女像がある。それはカッパを着ていて、雨に向かって進んでいる像。卒業して、今、主婦になり出産もしましたが、ふり返ってみると女性の人生って大変なことばかりなんだとわかる。そういうつらいときに、『そういえば希望の乙女も雨に向かって歩いてたなあ。』と思ったり。自分と『希望の乙女』像を重ねて見ていることもあります。」(Hさん)

「希望の乙女」像は、開学一年目の1973年に創立者の池田より寄贈されたブロンズ像である⁽²⁹⁾。AさんとHさんの語りからは、「希望の乙女」像を、厳しい現実の生活においても、希望を持ち続け前に進みゆく女性の象徴としてとらえていることが読み取れる。特にHさんは、自分自身と重ねて見ることにより、雨に向かって歩くカッパを着た「希望の乙女」像の持つ意味について新たに思いをめぐらせているようである。

・池田の言説の再解釈性について

今回、インタビューを通して新たに分かったこととして、数人の対象者からの語りから、池田の言説について一つの発見があった。それは、池田の言説は、聞いたその時点での感想と、年月を経た時の感想とでは解釈が異なることがあるという点である。例えば、『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という有名な指導についても以下のような語りが見られた。

⁽²⁹⁾ 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会 編『希望の乙女 創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、巻頭ページ。

「第一回入学式のときに、『他人の不幸のうえに、自分の幸福を築くことはしない』という指導があったんですが、あの時の先生の思い、それから何度も新たに学びました。その場で聞いたその時には、すごく平坦な言葉に思えた。分かっているつもりだったけど、今思うと本当にその一点が大事だったんだと思う。あのとき、すごく大事なことをそのままの形で伝えてくださったんだと思う。しみじみとわかりました。」（Bさん）

「（入学した時の感想）いよいよ学園に入ったからには、秘中の奥義を教えてもらえるのではと思ったが、『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という指導だし、これって普通じゃないか？と思った。でも今ふりかえると、とても大事なことなんだったんだな。」（Fさん）

「学園の時に先生から伺った指導はそのまま自分の中に入るが、そのときはわからないことが多い。でも忘れない、しっかりと記憶している。そのときのご指導が、『あ、こういうことなんだな』と、あとで（何年かしてから）分かることがある。」（Eさん）

「先生の言葉って、そのときに感じるものもあるけど、5年後、10年後に、『あ、こういう意味だったのか』と気づくことがある。」（Hさん）

このように、今回の対象者から見られた特徴としては、池田の発する言葉に対して、再度解釈を試みる傾向が伺えた。彼らは、最初に池田の言葉を聞いたときに抱いた感想があったら、その言葉の奥に隠された（もしくは当時気づくことができなかった）意味合いに後々になって気づいたという体験を語ってくれた。5年後、10年後とメッセージの受け手としての自分自身が変化したからこそ、当時の池田の言葉に新たな意味を見出し、そこに込められた思いを再確認するという形で、それぞれ池田の言説を位置づけ直していることが分かった。これは言説の再解釈という観点から見ると、今回数人の対象者から同じような回答が得られたということは非常に興味深いといえる。池田の言説が、二度三度と吟味され、再解釈にたえうるものであることを示す一つの例であるといえる。

また、この「言説の再解釈性」は池田が「30代、40代が勝負」と語ったことにも見られる。池田は、1978年の第6期生入学記念懇談会において、新入生に対し以下のように語っている。「どうか、新入生の皆さんも先輩によくついて、一人も落伍者がでることなく、見事に全員がこの学園から巣立っていただきたい。この学園で育っていった場合には、40代になったときに、優れた心豊かな、福運にみちた勝利の人生が待っているということだけは、私は絶対の確信があります。一番大事な人生の総仕上げの時に勝てる基盤を、今、作っているのです。」⁽³⁰⁾

「あのとき、女性は40代が勝負という話を聞いて、そのときは、ああ、そうなんだと思っていたが、今48歳。私にとって40代、50代って一番充実しているし、先生がおっしゃる通り、この時幸せかどうかは一つの試金石だと思います。」（Gさん）

「人生の勝負は40代だ、ということをも、15、16歳の時に言われたのですが、このことはあとになって響く言葉だと思います。」（Iさん）

Gさん、Iさんの語りから、当時はよくわからなかった40代に今自分自身が到達してみて、あのときの指導の明確さを改めて認識し、池田の言説を再解釈している様子が伺えた。

⁽³⁰⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、288頁。

3. 考察

本研究では、創価女子学園の卒業生へのインタビューを通して、草創期の学園の様子や、当時の池田の指導が卒業生のその後の人生にどのような影響を与えたかなどを、彼らの語りを通して明らかにすることを目的とした。

志望動機については、自分自身で志望した者から、親や知人から勧められてという回答がみられた。自分で志願した者の多くが、理由として「創立者にひかれて」という点をあげた。入学後の変化については、多くの対象者が「変化があった」と回答した。変化のあった側面については、創立者に対する姿勢などがあげられた。学園時代にあった印象深いことについては、健康祭や希望祭などの主要な行事があげられ、そのなかでの創立者のかけられた言葉やスピーチが語られていた。このように、当時の学園生活についての質問では、多くの対象者が「創立者との出会い」を一つの軸にして記憶を構成している様子がうかがえた。

次に、今からふりかえてみたときの学園生活の意味づけについては、「創立者との原点をつかった」をはじめとし、「精神的な基盤になった」「すべての財産になっている」など、3年間の創価女子学園での生活を、自身の人生の一過程として大きく位置付けている観点が見られた。「もう一度学園生活を送りたいですか」という質問については、ほとんどの対象者が「はい」と回答し、学園生活の思い出を素晴らしいものにとらえていることがわかった。学園生活の良かった点については、「友人関係の構築」「寮生活」「行事への取り組み」「新しい伝統を築いたこと」「先生との出会い」「長距離通学による身体的・精神的鍛錬」などがあげられ、また反省点については、「創立者を求める姿勢の欠如」「先輩・後輩の絆をうまく築けなかったこと」「勉強不足」などの観点があげられた。今も心に残っている創立者の指導については、卒業時の指針を含めて、「親に迷惑をかけない」「学園生は絶対に不幸にはならない」「女子は力よりも福運をつけなさい」「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」などの多くの回答が得られた。さらに、多くの対象者が堂会総会における池田の恋愛や結婚についての指導についてふれていた。また、創立者の池田が、学園生を娘のように可愛がり、学園生が池田を父のように慕うという現象が見られたことについても、多くの対象者からの語りを得ることができ、その中で、この『父と娘』の絆の形成」という観点が、創価女子学園ならではの思想的独自性のひとつとしてあげられた。創価教育の継承という観点からの質問については、今回、ほぼ全員が自らの受けた教育と同じ教育をわが子にも受けさせたいと思っていることが分かり、自身が創価女子学園で受けた教育を、家庭教育だけでは授けることの難しい精神的な財産のひとつとしてとらえ、高く評価していることが見出された。

女子教育については、「女性同士の美しい友情の連帯」「対話の精神の育成」「自立心・主体性の養成、リーダーシップの発揮」「教員のきめ細やかな指導」が女子教育の良さとしてあげられた。さらに、平和構築における女性の役割という観点から、女性の持つ特質が平和へどのように貢献しうるのかについて言及した語りが見られた。

幸福観については「創立者と共に生きる」という人生の目的を見据えた観点とともに、「他人の幸せのために動くこと」「人に喜ばれること」など「他者に対する利他的精神」を反映した回答や、

「変化する環境に柔軟に対応しながら、自分らしく生きること」など自身の心の持ち方に言及する観点があげられた。理想の女性については、精神的側面として「心が広い」「思いが深い」「心のきれいな人」「芯の強い人」「やさしい」「明るい」「温かい」といった回答があげられ、具体的な行動面として『「他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない」という信条を持ち、行動する人」「自分で考える人」「社会に開いていける人」「社会に貢献して、なおかつ幸福をめざす人」といった観点があげられた。

これらの回答をふまえて、今回新たに発見することができた知見として以下の3点にまとめて考察する。

① 創価女子学園の思想的基盤——3年間の学園生活の意味づけとは

今回のインタビューを通して、多くの対象者が、3年間の学園生活を自身の人生を方向づける精神的基盤として大きくとらえていることがわかった。特に創立者の池田との出会いや、彼から指導された言葉が、対象者らの人生や幸福というものに対する価値観に影響を及ぼしていると考えられる。学園生活の意味について、以下の語りが見られた。

「どんなにちっぽけな自分でも絶対に社会に何かができるはず、って思えたのも、学園生活があったからです。例えば、私はほんの主婦ですが、家事・育児をきちんとやるのが先生への恩返しなんだと思えるのは、またどんな人にも使命があるという視点に立たせていただいたのも、学園生活があったから。学園生活では一人ひとりが大事なんだよ、という創立者の思いを感じることができた。」（Iさん）

このようなIさんの語りで見られるように、学園生活に培われた視点が、その後の人生の精神的骨格になっている点が見られる。また、その精神的基盤が今でも自身の胸中に残り、日常生活のレベルにおいても発揮されている点はある意味驚くべきことといえよう。

② 幸福観や女性の生き方について

今回は、女性の生き方について「何を幸福ととらえるか」という幸福観と、「理想の女性について」という2つの質問を試みた。幸福観の質問については、多くの対象者が「先生と生きる人生」「先生の弟子として生きること」など、池田を人生の師匠としてとらえたうえで、弟子として生きる人生を選択していることが分かり、これが卒業生の一つの特徴として見出された。また、「人のために尽くすこと」を高く評価している観点が見られることから、創価女子学園において、人格形成の観点から、何らかの形で利他的精神の養成が行われていたのではないかと見ることができる。

前回の論文で、筆者は女子教育の特徴として「人間教育」「リーダーの育成」「幸福観」「創造性の追求」「平和の志向性」の5点を、池田の思想の独自性としてあげた⁽³¹⁾。今回のインタビューを通して「確固たる幸福観の確立」「平和の志向性」については、卒業生に脈々と受け継がれてい

⁽³¹⁾ 井上比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（1）—」、75頁。

ることが見出されたことも一つの新しい知見といえる。

理想の女性像に関してであるが、こちらは対象者の職業によって、若干差が見られる傾向があった。主婦の対象者の多くは香峯子夫人を一つの理想としていたのに対し、仕事を持つ対象者2名は、「心のきれいな人。芯の強い、自分自身で考える人」「どんどん社会で貢献し、なおかつ幸福になっていく人」のような、具体的な女性のイメージを回答していた。これは、対象者らの置かれている環境や、自身の歩んできた人生が、女性として目指すべき理想像に少なからず影響を与えていると考えられる。さらに、理想の女性については、Iさんが以下のように語っている。

「先生が『思慮深い、さわやかな人に』と言われて、それがすごく大事だなと思った。『女性は月が出る瞬間のような品のあるさわやかな人』という言葉もありました。女性と言えば、『太陽のような、明るい』というイメージがすごくあるが、『月』と言うのもそうだな、と。」(Iさん)

Iさんの『思慮深い、さわやかな人に』という指導は、第2回蛍友祭の指導に見ることができる。池田は、自身が教育に一番力を入れていることを述べたあとで、「そこで、女子学園生に特にお願いしたいことは、一つはさわやかな女性になってほしいということです。一人の女性が一家にいて、そのさわやかさ、明るさによって、一家というものはどんなにか潤いが出るか。」⁽³²⁾とさわやかさについて言及している。さらに、「もう一点は、教養ある人になってもらいたいということです。つまり、品格を持ってもらいたい。また、それを敷衍するならば、思慮の深い人になってもらいたい。薄っぺらな浅はかな女子学園生になってもらいたくはない。思慮の深い、教養のある、芯のある女性であっていただきたいことが、私の理想であり願いです」⁽³³⁾と話しており、ここに池田の持つ一つの理想の女性像を見ることができるのではないだろうか。

③ 創価教育の継承

今回のインタビューにおいて新しく発見された、対象者らの共通点として「創価教育の継承」という観点がある。ほとんどの対象者において、わが子にも自分の受けた同じ創価教育を受けさせたいとの思いから、創価一貫教育機関(創価小学校、創価学園、創価大学)を受験させる傾向が見られた。それだけ、自身の受けた教育に価値を見出しており、学園生活の経験が子育てにも影響していることの表れともいえよう。

最後に、この研究の限界と今後の課題について述べる。今回は、研究対象が9名と多いとは言えなかったが、一人ひとりの対象者から十分な回答を得ることができたと感じている。だが、追加で掘り下げたい質問項目、改善が必要と考えられる項目があったことも事実であるので、さらに質問項目を精査し、今後は調査対象者を増やしてさらに広いサンプルの中から聞き取り調査を進めていくことも考えられる。また、今回の対象者は調査のタイムテーブルの関係上、東京在住の者に限られてしまったが、今後は、関西在住者なども含め地域を限定することなく広く対象者

⁽³²⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、302頁。

⁽³³⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、303頁。

を募ることも必要であろうし、職業も主婦に限らず、社会においてさまざまな分野で活躍する卒業生の声を聞き取ることも検討していきたい。また今回は創価女子学園のみに絞ったが、女子教育機関として創価女子短期大学もあるため、短大の卒業生へのインタビューも新たな調査計画として検討したい。

本研究は、卒業生のオーラル・ヒストリーという観点から、池田の教育思想に迫ることを目的としながらも、やはり対象者の語りをありのままに記述することに重きが置かれた。対象者の語りと池田の思想との関連性に関する議論については、質問項目に沿って大まかな考察を加えることはできたが、まだまだ深く踏み込んだ議論をおこなう余地があると言える。だが、卒業生の視点から見た学園生活を様々な側面から分析し、創立者との関わり、自身の内面の変化、卒業後の人生との関連をさぐるうえで、創価の女子教育の与えた影響について考察を加えることができたことは新たな知見になりうる。10代に受けた教育が、ここまで卒業生の人生全体を方向づけるものになっているという発見は、なかば予想していたとはいえ、驚くべきものであった。建学の精神を受け継ぐ卒業生という観点から考えると、今回の対象者たちは皆創価女子学園で受けた経験や教育を自らの精神的支柱や価値観の基盤として、卒業後の人生を送ってきたであろうことが推測される。その意味で、彼らを卒業生のライフヒストリーとして成功しているモデルケースのひとつと位置付けることも可能であるといえる。今回のインタビューを通して、対象者の語りの中から生まれたさまざまな言説、学園精神や創立者への思いは、池田研究を進める上で新たな研究資料となり、質問紙調査や文献調査からだけでは得ることができない貴重な記録となったことをここに記したい。

【謝辞】

本研究をおこなうにあたり、快く調査にご協力いただいた9名の調査協力者の皆さまに心より感謝申し上げます。長時間にわたってのインタビューにご協力いただき、御礼申し上げます。